

2022年 憂春

吉田 真人

今年は例年以上の寒い冬であったが、漸く春がやってきた。梅や桃に続き、桜も咲き始めた。本来は心弾む季節である。

しかし物憂い春だ。この物憂さの原因は偏にプーチンにある。連日TVで流されるウクライナの惨状、無差別爆撃と破壊、大量の避難民等々。画面で見ているだけでもPTSDになつてしまふそうだ。

ロシアへは二度行った。一回目はソ連時代で、「書こう会」に次の通り書いた。「モスクワ空港は薄暗く、入国審査官は若く、ほぼ丸刈り。盗人がスパイかと青い目で人を睨める。在ロンドンソ連大使館発行の査証^{ビザ}のみを入念にチェック。日本国のパスポートには手も触れない、そんな物信用できるか、ということだろう。」この時の不気味な視線が、現在のプーチンにうり二つ、怖い。

ウクライナに行ったことはないが、ドイツ駐在時によく利用したハイヤー会社の運転手の一人がウクライナ人であった。英語がカタコトだった彼と会話が弾んだ事はなかったが、実直そうな人柄が覗かれた。当時既に50才程だったので、今母国に帰り従軍していることはないだろうと思えるが…

日本の報道特番で「プーチンは本気だ。既にチエチエンのグロズヌイやシリアのアレッポで徹底的破壊をした実績通り、ウクライナでもそれを行うだろう。犠牲者を多く出さないためには白旗を早く出すべきだ。」とのたまう識者がいる。

敗者となり被占領される事への従容さは、多分、太平洋戦後のアメリカによる日本占領統治が、歴史的に見て珍しく寛容であった事による、謂わば期待ないし誤解に由来する。

敗戦は厳しいものである。武装解除された60万人の日本軍属がシベリヤに抑留され、6万人ほどが彼の地で終焉を迎えた。又、現在のウイグルやチベットの惨状をみれば、占領地となることの悲惨さを回避すべくウクライナ人が奮闘していることが理解できる。

現下の戦況は一喜一憂というか一喜多憂であるが、程なく停戦となりウクライナにも春が来ることを切に願っている。

(2022年3月24日)